

電子図書館って何でしょう

学術情報処理センター教授 只木進一

2000年4月に、佐賀大学情報処理センターが改組されて学術情報処理センターになりました。新しい学術情報処理センターの重要な役目の一つとして、電子図書館機能の整備充実があげられています。しかし、この「電子図書館」というもの、何を意味しているかがあまりはっきりしていません。学術情報処理センターが、附属図書館に協力させて頂いて、何かをるところまでは分かるのですが。

そこで、電子図書館というのは何なのかを、佐賀大学の「電子図書館」が実行しようとしていること、できるかどうか分からないことなどを、思うところを書いて見たいと思います。

「電子図書館」という言葉は、紙に印刷された書籍のオンライン化を直ちに連想させます。確かに、図書館が所蔵する紙に印刷された書籍などをオンライン化して、利用者の要求に応じて提供するという型の電子図書館が存在します [1]。また、図書館が有する様々なメディアの資料を、テーマに沿ってオンラインで見せるという型のものも存在します [2]。しかし、佐賀大学の「電子図書館」は、もっと違うものを目指したいと考えています。そこで、私達は、このプロジェクトを「とんぼの眼」と名付けました。いろいろなものを見渡せるイメージです。また、佐賀が多数のとんぼの住む地域であることにあやかりました。

もちろん、「とんぼの眼」の中には、蔵書目録と附属図書館所蔵の貴重書のオンライン化という図書館らしい機能が含まれています。附属図書館が持つ全ての書籍と雑誌の検索を WWW (World Wide Web) ブラウザから行うことができます。更に、佐賀大学に目指す書籍が無い場合には、国立情報学研究所のデータベース検索を通じて、全国の国立大学の附属図書館のどこにあるかを検索することもできます。公立の図書館との相互検索などができるようになって、市内にある書籍の相互

利用などができるようになるともっと良いでしょうね。

附属図書館には、様々な貴重書も所蔵されています。こうした貴重書は、時間とともに傷んでいくため、電子的画像として保存することが非常に重要になっています。附属図書館所属の貴重書うち、小城鍋島文庫の電子化の作業を進めています。この中には、「葉隠」などの文書、様々な行政上の書類、日記類などが含まれています。これらを、画像としてオンラインで見ただけでなく、所蔵文庫目録のオンラインデータベース構築も進めています。当時の江戸までの道中案内、今で言う旅行ガイドの「立場附」など素人が見ても面白い図版もありますので、是非御覧ください。また、ストーリーに沿って、佐賀に栄えた文化の姿を見て頂く企画も考えています。

「とんぼの眼」が普通の電子図書館と違うところは、佐賀大学が持つ教育や研究の情報はば広くオンラインで提供しようとしているところです。その中には、オンラインシラバスシステムがあります。シラバスとは、講義の内容や計画、受講生が事前に読んでおくべき資料や準備しておくべき事柄をまとめたものです。これをオンラインデータベース化することで、講義を選択する際の参考になるだけではありません。受講生は、WWW が利用できる所から何時でも講義計画や担当教員が示した課題や資料を見ることができるようになります。また、教員も、各年度の進行に合わせた計画の見直し、資料の適宜な提供ができるようになります。さらに、学外に対して、佐賀大学が行っている教育を知ってもらうことにもなります。

「とんぼの眼」では、更に、佐賀大学の各教員がどのような研究を行っているのか、どのような論文を書いているかなどをデータベース化する予定です。

学内には、公開の時期を待っている更に様々な

学術情報があるはずで、教員の開発して教材、講義などで配布している資料、研究用に収集した資料やデータなどです。これらのデータベース化などを支援して、「とんぼの眼」の充実を図りたいと考えています。

これまで出てきたデータベースが、ばらばらに存在しているだけでは面白くありません。「とんぼの眼」は、これらを横断的に検索する機能も備えています。例えば、「葉隠」というキーワードで検索すると、小城鍋島文庫の「葉隠」そのものだけでなく、「葉隠」の研究書、「葉隠」を扱う講義、「葉隠」に関する佐賀大学で出された博士論文や紀要論文などを見付けることができる機能です。更に、同様の横断検索機能を提供する他の電子図書館への検索も可能です。まさに、とんぼの眼のように複眼的検索なのです。

このようにオンラインの情報を増やしても、見るための環境が整わなければ意味が無いではないか、という声があります。しかし、見るものが無ければ環境を整えても意味がありません。見るものがあれば、環境は後から付いて来るというのは楽観でしょうか。

学術情報処理センターでは、附属図書館と協力して、情報端末の整備を行っています。一つは、附属図書館内の情報端末と情報コンセントの充実です。図書館で調べモノをしながら、キーボードを打って文書を作成する光景は、近い内に珍しくなくなるのではないのでしょうか。実は私も、キーボードが無いと文章が書けません。しかし、キーボードを叩く音が、耳障りな方も居ますから、マナー教育が必要ですね。

更に、学内の至るところで、自分の持ってきたノート型パーソナルコンピュータをネットワークに接続できるように、情報コンセントや無線LANの整備を進めています。数年のうちに、全ての教職員、学生がノート型パーソナルコンピュータを持って大学の様々な情報にアクセスするのが目標です。もちろん、それに合わせたセキュリティー管理の方策も準備中です。

こういう風に情報のオンライン化が進むと、大学で講義を聞くとか、図書館で調べモノをすると

いう、大学のあり方が大きく変わっていくような気がします。では、家に居れば済むようになるかという、そうでもないでしょう。研究をする上で、他の研究者と顔を合わせて議論することは非常に重要であることは、研究者ならば誰でも認めることでしょう。研究以外でも、他人と話して考えをまとめたり、決断をつけたりすることが多くあります。つまり、人とのコミュニケーションはやはり重要なのです。ですから、大学は人と人が研究と教育を巡って出会う場所として重要になっていくような気がします。その中心に「とんぼの眼」があれば嬉しい限りです。

「とんぼの眼」プロジェクトは、新しい情報提供、情報利用のあり方を模索しています。大学での学習、研究、教育という活動に対する新しいビジネスモデルを作りたいと考えています。ご意見ご批判をお願いいたします。「とんぼの眼」のホームページは、

<http://www.dl.saga-u.ac.jp>

です。

最後に、「とんぼの眼」プロジェクトの計画、実行には多数の方々に協力を頂いています。この計画のワーキンググループのメンバーの方々、貴重書の目録作りや解題作成をして頂いているの方々、データベースシステムのソフトウェア開発をして頂いた方々にこの場を借りてお礼を申し上げ、一層のご協力をお願いして、この駄文を終えさせていただきます。

参考文献

- [1] 例えば京都大学電子図書館
<http://ddb.libnet.kulib.kyoto-u.ac.jp>
- [2] 例えば *American Memory*
<http://memory.loc.gov/>